

蕭乾が愛した小説

—「籬下」と「矮檐」を読んで

葉 紅

『蕭乾全集』（全七巻本）が2005年10月に中国湖北長江出版集団・湖北人民出版社から出版された。当シリーズの小説巻の巻首を飾る「梨皮」と、それに続く作品の「人離散」は、共に1929年『燕大月刊』で発表された作品である。それらは蕭乾の創作生活の中でもごく初期の作品で、長い間、世間に知られていなかった事が明らかにされた¹⁾。一方、巻末の「法学博士」は1998年1月に『人民日報』で世に出たのみで、全集本に納められたのが当シリーズで初めてである。

三十年近くも前の1978年の「改正」後、作家、ジャーナリスト、翻訳家蕭乾が文筆業に復帰した。正確には復帰を許されるようになったと言うべきであろう。この時期を境に、中国国内の出版業界のみならず、香港、台湾においても、内外の読者に蕭乾のかつての作品を届けるべく、再版し、また、新たな作品の執筆を促すなど、世間は蕭乾に注目を集めた。それからの20数年間、『蕭乾散文特写選²⁾』、『蕭乾短編小説選³⁾』、『蕭乾書信集⁴⁾』など数多くの単行本以外にも、1983年の『蕭乾選集⁵⁾』を皮切りに『蕭乾文集⁶⁾』、台湾版の六巻もの『蕭乾選集⁷⁾』、翻訳作品の集大成として、『蕭乾訳作全集⁸⁾』（全十巻）も相次いで上梓された。

これらの著作は、蕭乾がまだ二十歳前後の自叙伝風小説から、『大公報』の記者になって、文芸批評や地方を訪ねてのルポ、第二次世界大戦に突入したヨーロッパの国々からの戦況レポート、エッセイ、雑文、翻訳作品、晩年、夫人の文潔若とのまさに二人三脚のような協力体制で完訳した「ユリシース」まで網羅している。その膨大な作品群は、半世紀以上も前の人々の暮らしのさまざまな側面を伝えてくれた。中でも、主に青年期に発表した小説は、作者の身近な事象を鮮やかなタッチで描かれ、作家の情感は勿論に、三十年代の市井の息吹までも、時空を超えて伝わってきている。そして何より作品が伝えてくれた人間としての蕭乾の内面に私は強く引かれ、感動を覚えた。小稿では、「籬下」と「矮檐」という二編の小説に焦点を当て、論を進めていくとする。

I

作家蕭乾の生い立ちについて、拙稿「蕭乾と楊剛—蕭乾の作品を手がかりに⁹⁾」で触れた一節があるので、ここでは重複を避けるために省きたい。本稿の主題との関係上、ひとつだけ補足するとすれば、蕭乾自身が長い間、表沙汰にしたくなかったモンゴル族出身という点である。彼がこの世に生を受ける前から、父親が亡くなった事、赤貧の幼年期を過ごした事、加えてモンゴル族の出自、これらが後になっても、ある種の劣等感となって、付きまとったと蕭乾は、折に触れて書いている。人の前では、いかなる場合も「矮人一頭」（他人より頭一つ分低い—筆者訳）と思うその辺りの気持ちを詳細に述べた一文が『一本褪色の相冊¹⁰⁾』で見つける事ができる。

あのような社会では、貧乏ということ自体、ある種の恥辱であった。それは軽蔑され、差別視され、しいては鞭打ちされるに値するものであった。ましては僕にはその他に、民族の違い、慣わしの差異によって、もたらされる抑圧が申しかかっていた。……僕はモンゴル族で、つまり（中国では—筆者注）少数民族である。この事実も1956年の幹部審査まで隠し続け、自伝を書かされた時に始めて告白した。そのこと自体が僕自身の劣等意識の要因であることを物語っている。

……

解放後、少数民族の地位が大きく変わった。40歳以下の読者はモンゴル族であって、漢族ではないというだけで、何故劣等感を覚えなければいけないのかおそらく理解しがたいだろう。あの頃は、一部の少数民族の名称に犬偏をつけて表すことさえあったのだ。呼和浩特の旧称は「綏遠」や「帰化」であったし、当時の赤、黄、青、白、黒の五色の国旗は赤のみが漢族を象徴していた。学校の中でも、漢族の生徒が回族の子供を追い回して、聞くに堪え難いような下品な言葉を浴びさせ、ちょっとでも地方訛りのある南から来た生徒を「豆腐の皮」やら「南のいなかつぺ」やら、呼ばわりしたのだった。

……

このような空気の中で、僕は自分のモンゴル族であるという出自をごまかし、隠すしかなかった。本籍を書かなければいけないような場合、大抵、でたらめに作ってはごまかしたのだった。

……

とにかく、この民族問題も僕の劣等意識の要因であった。僕の幼い心にとりわけ卑屈の烙印を押されたのは、やはり貧困と、生まれてから十四年間も続いた居候生活である。

その作家蕭乾の形成を大きく左右した、モンゴル族人を父に生まれたこと、貧乏生活だった事、及び十数年に及ぶ他人の家での居候生活の事については、どれも作家としての活動初期に書かれた小説に色濃く影を落としている。中でも本稿で取り上げる「籬下」、「矮檐」のように、タイトルそのものが主題を端的に表すものもあり、作家の意識の深層を窺わせ、興味をそそられる。

II

本題の二編の小説に入る前に、蕭乾が長い創作生涯の中で、小説に関わった時期を辿り、自ら残した大量の回想録から彼自身の小説に対する思いを触れてみたい。

『蕭乾生平年表¹¹⁾』によると、蕭乾は、1930年代の初め大学在学中に小説の執筆活動をスタートさせた。処女作¹²⁾とされている「蚕」が1933年『大公報』文芸欄にて発表された。それ以降の大学卒業後三十年代後半まで、長編小説『夢之谷』と数十編の短編小説を発表し続けた。しかし、1939年ロンドン大学東方学院の教職の任に赴き、同時に『大公報』の特派員を兼職した七年の間は、主に戦乱中の、欧州の国々についてルポルタージュやエッセイを書き残している。1946年帰国直後の時期も含め、蕭乾を待ち構えていたそれからの半世紀の歳月は、ついに彼に小説創作のチャンスを与える事はなかった。

1934年の『我与文学』で文学との関わりと自らの志を述べた。それから六十年の年月が流れ、最新版の『蕭乾全集』の刊行に際し、書かれた序文には「最終的には小説を書きたかったのだが、すべては当人の意志で動くものではない」と回想した一節が載っている。そのある種達観しているような気持ちも感じ取れる言葉には、蕭乾の幾度もの嵐が吹き荒ぶ中を耐え忍んできた老作家の心境を如実に表している。

実際のところ、六十年あまりに及ぶ長い歳月の中で、自分の意思で執筆活動に専念できるチャンス到来と蕭乾が思えた時期が数回あった。しかし、いずれも作家一人の力で、左右できるものではなかった。

1955年の初めに中国作家協会にいた蕭乾は、自らの希望にそう形で、「専業創作人員」になり、つまり創作活動に専念する事を許され、彼は大喜びをした。蕭乾は

三年ほど炭鉱に出向き、現場の生活を体験して、二十年代の労働者運動を題材とする長編の構造を練り、その計画を打ち出した。が、数日もしないうちに政治の天気図が変わり、計画が頓挫してしまった。

後に思い返してみると、それは全くばかげた事で、テーマのみ先行している形であった事もさることながら、たとえ何かを書けたとしても、有害な作品とみなされるに間違いなかった。友人のそういう言い分には、実際のところ先見の明があった。それなのに当時の僕は自信たっぷり、すぐにでも荷物をまとめて炭鉱に行こうとしていた¹³⁾。

さらにその二年後の1957年の末、蕭乾は翻訳のみの自宅勤務を命じられた時期があった。それは同年の「六月の雪」が降った直後で、戦戦恐恐としていた蕭乾が、仕事先に顔を出さずに済むという点では、むしろほっとした向きがあった。すでに下放に行かされた夫人に代わって、三人の子供の世話を引き受ける傍ら、各種の辞書、年鑑、索引を机に並べ、翻訳に専念しようとした。しかし、早くも58年の4月には河北省にある農場に行かされるようになった。出立の前に「僕は食事をしながら、そばに座っている子供をきつく抱きしめていた。食事が済んで、潔若に念を押された通りに古新聞でデスクを覆いかぶせた。これから先、この机にどれだけの埃が溜まってしまうのか誰も想像つかない¹⁴⁾。」このとき蕭乾が言いつけられたのは、いつまた帰京できるかわからない長期の「監督労働」だった。

その後の1961年初夏、「監督労働」が解かれ、蕭乾は呼び戻され、翻訳の仕事と言いつけられたのだった。

このように、五十年代末までは、蕭乾は逆境の中にいながらも、小説ではないにしろ、なお何らかの形でペンをとろうとした。

Ⅲ

小説の創作について蕭乾は次のような文を残している。「僕の五十年に及ぶ創作人生において、小説をわずかに五年（1933～1938）間しか書かなかった。その最初の五年間を思い返してみると、あの頃、創作意欲は実に旺盛で、まるで題材というものがあるに転がっていて、ペンをさえ握れば、人物やらストーリーやらが僕を襲い掛かってくるようだった¹⁵⁾」五年の間、『大公報』文芸欄には「郵票」、

「花子与老黄」,「栗子」,「印子車の命運」など、月刊誌『水星』には「籬下」,「皈依」,「曇」,『国聞週報』や『文学季刊』には「矮檐」,「吉期」など、数十編の短編小説を発表し、ほぼ同時期に雑誌『文叢』に「夢之谷」の連載もしていた。まさに多作の時期だった。なお「栗子」と「皈依」の二編は、夫人の文潔若と鈴木貞美によって日本語訳され、『早稲田文学¹⁶⁾』で発表されている。その中で「籬下」と「矮檐」の二編に筆者は強く惹かれた。

概して、蕭乾の作品は、庶民の生活を暖かいまなざしでもって描くことに特徴がある。「印子車の命運」然り、「皈依」然り、「籬下」と「矮檐」も例外ではない。ただ、この二編はそれだけでなく、暮らしむきそのものの大変さ以外にも、作者の寂しさをそれぞれのタイトルでもって、伝えようとしているように思えてなりません。作者の『地図を持たない旅人』などの回顧録で、自らの作品を振り返り、それによって、読者が作品のイメージを掴むのがかなり容易になった事も事実である。だが、蕭乾がこの二作品で描いた主人公と共に、彼自身も垣根の外や軒下に追いやられ、そして、いつも安住の地を求めている自分の姿をそこに重ねたではなからうか。そのような命題で読者のわれわれにメッセージを送っているように思われる。

折しも、最新刊の『蕭乾全集¹⁷⁾』の作家自身による序文で、こんな一節を読んだ。

人々に自分の作品の中で、もっとも気に入っているのは、どれかと聞かれた時、僕は迷わず小説だと答える。小説の中でも、もっとも好きなのは「籬下」と「矮檐」である。僕は、それらを芸術的に優劣をつけて批評するのではなく、—それは評論家たちの聖域で一原作者があれこれと言うべきではない。僕が気に入っているのは、それらの二編はいかに書けているかではなく、その中の多くのプロットがフィクションであったにせよ、僕自身の心の傷跡を撫でて、書いたものだからである。

寄人籬下

もともと先人の文体を踏襲し、新たな創意工夫がないことを指すこの言葉は、後に他人に頼って生き長らえる意味を持つようになった。蕭乾は生まれると同時に母親といわゆる「寄人籬下」の生活していた。10歳の時に母親を亡くしてからも、そういう生活がさらに数年間続いた。「籬下」と「矮檐」は正にそういう視点で描かれた作品である。

これは、もしかすると僕の最も自叙伝的な小説であり、若い頃の一側面であろう。

十六歳の時に従兄と決別し、独り立ちするまでは殆どそういう「寄人籬下」の生活を送っていた¹⁸⁾。

「籬下」は蕭乾が二十四歳の時に発表した作品である。

七、八歳であろう環哥が、父親に捨てられた母親と共に、親類の元に身を寄せることを中心に描かれた物語で、母親にとっての一大事を、子供の目線で話を展開していく。事情を理解し得るはずもない子供の無邪気さ、子供が故に起こす揉め事の数々に母が板ばさみになりながら、身を小さくしていく。

柳条箱

「籬下」の始めと終わりの両方にはほぼ同じような描写が出てくる。

天亮，環哥就被由熟睡中拖下炕来，一条褥套和一只柳条箱都系在秃王牲口背上了。

夜が明けた頃、環哥は熟睡しているところオンドルから引きずられ、降ろされた。一枚の布団とひとつの柳行李はすでに秃頭の王爺のロバの背中にくくりつけられていた。

到環哥醒来时，那只柳条箱又已捆好立在门口了。

環哥が眼を覚ました頃は、あの柳行李は梱包され、すでに入りに口に立てかけられてあった。

前者は実の父親により、家を追い出され、後者は身を寄せていた寄寓先のおじに追い払われた時の、それぞれの箇所である。母親と子供は家とその後の寄寓先を離れる。それは、既に逆らうことなどできない、既成事実になり、それ以外は選択肢がなかった。前者は「ロバの背中にくくりつけられた一枚の布団とひとつの柳行李」で表され、後者のそれは、「あの柳行李はまた既に梱包され、入りにたてかけられてあった」という。

母ちゃんと父ちゃんの諍いや、しまいには手を出すことも村では見慣れたことだった。父ちゃんが半年も家をあげ、家に帰るといつも一頻り口論が起きるのだっ

た。(中略)

環哥の父ちゃんは、都会から帰ってきた翌日にもまた、母ちゃんと口論した。言い合っているうちに、がちゃん！とどんぶりが母ちゃんに向かって投げられた。母ちゃんは慌てて腕でよけた。父ちゃんは、母ちゃんの髪をまるで一束の麻のようにぎゅっとひつつかみ、平手打ちを浴びせた。母ちゃんは泣いた。環哥は真ん中に挟まれ、小さな足をじたばたさせながら、一緒に泣いた。その騒ぎに驚いて、積み上げた作物の苗の上に伏せていた犬までも、ワン、ワンと吠え出した。

そんな父ちゃんだから、追い出された時の環哥は「熟睡しているところ、オンドルから引きずり、降ろされた」のだった。その時から、母親と共に流浪の身となった。母子の当面の落ち着き先となったのは環哥のおばさんに当たる家であった。その家の主は母子の到来には、「きわめて丁重で、きわめて丁寧な態度で母ちゃんを宥めつつ、『場所はいくらでもあります。家族じゃありませんか。』」と言った。この温和な男を前に母ちゃんは、かえって、泣き出しそうになった。」環哥がしでかす幾度の揉め事の末、「柳行李がまたすでに梱包され、入り口に立てかけてあった」という状況に至っても、「おじさんは笑みを浮かべながら、入ってきた。顎を撫でつつ、きわめて穏やかで、丁重な面持ちでこう言った。『場所はいくらでもあります。家族じゃありませんか。どうしてこんなにも急に？』環哥は賛成の目つきで母ちゃんを見つめた。しかし母ちゃんは無理に笑顔を見せ、その温和な男に頭を振った。」

いずれにしても、母子には居場所がないことは明らかだった。その物を言わない柳行李を小道具として登場させ、作者の気持ちを代弁させた点では、非常に効果的と言えよう。

小脑袋

「籬下」と「矮檐」は子供の目を通して、大人の世界を描いている。父親に家を追い出されるその非日常的な事態の中、母親の憂慮と、まだ分別がつかない子供の無邪気さがそれぞれ特徴のある描き方をされている。

母親が環哥を「悪狠狠地」睨み、叱る場面が数回登場する。憎憎しげに睨む、毒々しい叱り方をする、とでも訳す所だが、通常、母親がわが子に対してする仕種ではない。血のつながった、たった一人のわが子に、あえてそういう態度をとる母親に仕立てる事によって、家を失い、居候の身になる大人側のやるせない思いを醸し出

しているように思われる。「『母ちゃんが変わった』と環哥が困惑した」ほど、それまでの母ちゃんと、打って変わっただろう。歯軋りして環哥を叱るにしろ、食卓についている環哥を不意に席から降ろすにしろ、植えてある花に小便をした環哥を引き摺って、部屋に入れるくだりにしろ、わが子の一挙手一投足には、非常に凶暴な母親像になっている。先の見通しが立たない中の母親の閉塞感、他人の厄介になるからには、声を潜めて暮らすより他ない母親なりの懸命さも、この母親の特異性を作り出したのであろう。

一方、環哥の描き方はあくまでも伸びやかであった。お堀で、泥鰯を掴まえ、泥だらけになって、おじさんの大目玉を食らう。母ちゃんにあげたいからと、勝手に花を摘みとっては、従妹を泣かせてしまう。役人への贈答用の棗を、木から雨のごとく降らせてしまう。そういう数々の悪戯をやりのけてしまう環哥についての描写からは、慈しみ、見守るような眼差しさえ感じられる。

一例として、片時もじっとしてられない環哥とその仲間の動きに、作者は頻繁に「小」を付けて、書いているのを挙げる事ができる。

天不早了呢。環哥の小肚里嚕嚕地都响了起来。

当人們正謙社上下座的当儿，環哥已爽快地把自己那小身躯安置在桌子方便的一角。

環哥躺在那張木床上，晃着小脑袋，想着……

她只好用手拍拍甥女抽縮着得小肩膀，……

子供だから、「小」、寸法的に小さいから、「小」という事は大いに言える。しかし、そのみではない「小肚里」、「小身躯」などは赤子ならいざ知らず、七、八歳の子供のそういう描写に作者の特別思いが託されているように思う。そういう本来言わば母親的な心情を文中では、当の母親と掛け離れたところで、第三者的な客観描写の、地の文で、度々登場させている。ややもすると、母性という独特な情感として、片付けられてしまいがちな部分を、読者と共感できるような仕上がりに作家の筆の巧みさを見た思いがする。

楽子

「籬下」の2年後に「矮檐」が生まれた。「既在矮檐下，怎敢不低頭。」一低い軒下に居ては、首を垂れないわけにはいかない。居候の身ならば、他人に従った方が賢明だと言う。「既在人籬下，怎敢不低頭。」とも言う。それを念頭に置いた構成に

なっている事は蕭乾が「余墨¹⁹⁾」の中でも書いている。

しかし、「矮檐」はさらに主人公の子供が学費を払えないために、先生から酷い仕打ちを受ける内容を主に描かれている。母親はどうにか滞納になっていた学費を工面できたと、ホッとした矢先に、今度は先生の誕生日がやってきた。先生にプレゼントをしないとまた殴られてしまう。またもや難題に直面する。その渦中の子供の名は楽子と言う。

蕭乾は自分の小説に登場した人物への愛着から、後に実の子供たちにその名前をつけて、愛称とした²⁰⁾。しかし、「矮檐」はそれとは反対である。楽子は蕭乾が幼い時から母親に付けられた愛称である。亡くなった父親と違って、生来明るい性格の蕭乾は、いつもニコニコしていたからと言う。そういう幼い時に呼ばれた愛称を用いて、小説の中の人物を描くこと自体、作者が作品に込める思いが格別と言えよう。

IV

自分の少年時代の体験とオーバーラップしたこの二編の作品が、もっとも気に入っている作品である一方、後年の蕭乾はその根底にある考えを決して肯定的にはとらなかった。1992年の「想当初蹲牛棚²¹⁾」には、こう記している。

1957年以降、僕が規格外にされてから、よく「既在矮檐下、怎敢不低頭」を思い出すようにしていた。(中略)あの時代は首を垂れていなければ、命の保証がなかった。それでも、僕はあんな「革命」はそう長く続くはずがないと思った。(中略)今、思い出してみると、本当に恥ずかしく、我ながら、情けない。暴力を前にして、僕は立ち向かったのではなく、ただひたすら、いつかは変わるだろうと思っていただけだった。

さらに「我的年輪²²⁾」で、こうも書いている。

僕はそれでも僕の夢を描いた。自分の「紅毛長談²³⁾」で、二十年後、つまり1996年の中国は、どこまでも豊かで、文明の世で、自由の上、平等の樂園になっている理想像を描いた。まさか、僕を待ち伏せていたのは、新たな「低いひさし」、一いいえ、棍棒を使って、僕をあの高いひさしの外に追い出したのだった。僕の頭上には

瓦の一枚もなく、風雨を忍ぶ巢さえなかった。(中略) 僕はよろめきながら、何も言えずに前へ進んだ。ここはどこ？僕は寒空の蟬のように黙りこく、どこにも身を寄せる場所はなかった。あの幻想上の1966年の「楽園」が現れた時、死だけがもっとも美しい誘惑として、残っていたのだった。僕の命はあの辺りで、浮遊している一筋の細糸のようだった。どうやって、自分の歯で断ち切ろうかと良く考えていたものだ。

蕭乾の沈黙の歳月がそれからさらに十年以上も続いた。それでも「僕は決して悲観的にならなかった。睡眠薬を飲んだあの一瞬だって、悲観していたわけではなかった。あの野蛮な侮辱に耐え切れなかったのである。時代の車輪は決して反転しないと僕は確信している²⁴⁾。」どんな劣悪な状況に置かれても、決して諦めない。生命への渴望が彼に生きる力を与え、九十歳の生命の源になっていた。

少年時代に長年の居候生活の体験から安住の家に憧れ、一人前になって結婚と離婚を繰り返し²⁵⁾、生涯の伴侶、文潔若に巡り合えた時は、思わず、「僕の四十年来の夢がとうとう実現した—僕は家庭を見つけた²⁶⁾」と呟いたと言う。その後、何度も人生の危機に直面するようになりながらも、敢然と命と向き合って、生き長らえたところに作家蕭乾の人の強さを感じ、その力を与えてくれたのが、あの二編の小説であり、何よりもあの二編の小説がもっとも気に入ったものだという言葉の真実が、そこにあるのではなかろうか。

註

- 1) 長い間、「蚕」を処女作と考えられてきたが、それより以前の1929年にすでに作品を発表していることを編集者の傳光明の努力により、明らかになった事を述べている。
- 2) 人民文学出版社 1980年
- 3) 人民文学出版社 1982年
- 4) 傳光明編 河南教育出版社 1991年
- 5) 四川人民出版社
- 6) 浙江人民出版社 1998年
- 7) 台湾商務印書館 1992年
- 8) 太白文芸出版社 2005年
- 9) 「駿河台大学論叢」第30号
- 10) 『蕭乾短編小説選』序文 注3) 参照

蕭乾が愛した小説
—「籬下」と「矮檐」を讀んで

- 11) 『蕭乾研究資料』北京十月文芸出版社 1981年
- 12) 注1) 参照
- 13) 『搬家史』湖南人民出版社 1987年
- 14) 前注参照
- 15) 「ある樂觀主義者の独白」『蕭乾散文』上 中国放送テレビ出版社 1997年
- 16) 1986年6月号
- 17) 冒頭参照
- 18) 「余墨」『蕭乾全集』
- 19) 前注参照
- 20) 「余墨」『『俘虜』我的仲夏夜之梦』
- 21) 『蕭乾 文学生涯六十年』鷺江出版社 1993年
- 22) 『蕭乾散文』上 中国放送テレビ出版社 1997年
- 23) 上海觀察社 1948年 台声出版社 1990年再版
- 24) 「唉，我这意識流」『蕭乾散文』上
- 25) 「蕭乾の繰り返された結婚と離婚」岡田祥子（法政大学言語・文化センター 第2号 2005年）はそのあたりの事情を詳しくまとめたもので、参照されたい。
- 26) 『蕭乾 文潔若』中国青年出版社 1995年